

私の特別な時間「母とのごはん」

三ツ城小学校 五年 久保芽花

私が食べた一番おいしいごはんは、母と二人で食べる、母の作ったごはんです。家族みんなで食べるごはんとおいしいけれど、母とゆくりお話をしながら食べるごはんが私は大好きです。

私の家族は、兄はもう社会人で、姉は大学生なので一人暮らし。父は仕事で帰りがおそいので、母と二人で夜ごはんを食べるのは当たり前でした。母は私が一人で長時間の番するのはさびしいだろうから、といつとなく早く帰ってきてくれます。そして、帰ってくる時、おそくな、ごめんね。夜ごはん、すぐつくるからね。

と、あちまりながら台所へ向かいます。そのような母のすがたから、私は、感謝の気持ちと、そんなけいけいの気持ちが一日、一日と、大きく、ふくらんでいきます。ただ、さます、とい

う言葉の中に私は、いつそごはんを作、てくれ  
てありがとう、とたくさんのありがとうを  
つめこんで、気持ちよくめて言、ています。  
母とごはんを食べるとき、いただきまますを  
した後の母の一言目は必ず、  
「今日は何したの？」

です。そう聞かれると私は、今日の出来事を  
全部話します。今日体育があ、たよ、今日返  
されたテスト百点だ、たよ、などと、細かい  
事まで全て教えるのです。その時、母は優し  
い笑顔で相づちをしたり、私がうれしか、た  
ことがあると、自分のことのようによろこび  
共感してくれます。私が話し終わ、たら、次  
は母の番。母は学校の先生をしているので、  
母が担任をしている子の話をしたり、学校に  
ついて教えてくれます。話す時と聞く時と、  
母はと、こし笑顔で、私まで自然と笑顔にな  
れます。なので、いかな事があ、こと、母の  
笑顔が飛、ばしてくれるのです。

母がつくる料理の中で私が一番好きなのは、

主食より、お米です。母の炊くお米は、  
フフで、ほのかに香る優しいにおいが心を落  
ちつかせてくれます。そのお米はまるで母  
を表しているかのよう。そんなお米が私は大  
好きです。そのお米をもっとおいしくさせる  
のは、母との他愛もない会話なのです。

母と食べるごはんは、何だか時間がゆっく  
り進んでいるみたいで、ゆったりとしていま  
す。こんな毎日ある「当たり前」で私にと  
っては「特別」なのです。今日の、明日の、

明後日の、私の「特別」な時間を大切にすべ  
きたいです。そして母に言いたいです。

「いつも忙しいのにおいしい夜ごはんをつく  
ってくれてありがとうございます。めいの話を熱心に  
聞いてくれてありがとうございます。ママ、大好きだ  
よ。」

と。